郷土博通信

No.23

2024 春

CONTENTS

ポケット文庫（解説8頁）

■ ポケット文庫 ―― 1
■ 展示室の紹介 ―― 2～4
■ 新史料からみる貴族院議員としての鎌田勝太郎 ―― 5～7
■『ポケット文庫』について ―― 8
■ INFORMATION ―― 8

公益財団法人 鎌田共済会郷土博物館

第1展示室

内間銅鐸

銅鐸は弥生時代につくられた青銅器で、祭祀に使用されたと考えられています。はじめ木などに吊るし、内側に舌（ぜつ）と呼ばれる小さな棒をぶら下げ、揺らすなどして音を出していました。時代が下ると大型化していきます。

内間銅鐸は、1926（大正15）年陰暦３月に綾歌郡陶村字内間（綾歌郡綾川町陶内間）で出土しました。住民が井戸を掘ろうとして、地下約1.5mまで掘り進めたところで発見されています。当時の記録（注１）によると、「鰭ノ存スル部ヲ上下ニシテ鈕部ヲ下ニ底辺ノ一部ヲ上方ニシテ斜ニ横リ居タリ」とあります。銅鐸が埋まっていたのは河川の流れによって堆積した砂層であったため、その地に意図的に埋められたものではなく、近くの埋納場所から綾川に崩落し、移動して埋まったものと推定されます。発見当時、出土地は畑地の一角でしたが、現在は1966（昭和41）年に完成した府中ダムのため水没しています（図１）。

▲図1　赤丸内付近の湖底が推定出土地

内間銅鐸の高さは29.7cm、裾部の長径15.7cm・短径9.7cm、重量は1019gです。銅鐸としては小型に属します。扁平鈕式四区袈裟襷文（へんぺいちゅうしきよんくけさだすきもん）で、身の上端には１対の飾耳があります。また、身には鋳造時に湯（溶けた青銅）が十分にまわらなかったためにできた小孔（図２）や、後から補った鋳掛（いか）けの部分が確認できます。

▲図2　湯が不十分だったためにできた小孔（赤矢印の先）

内間銅鐸は2023（令和５）年10月から一般公開を始めたのですが、多くの方からいただいた感想は「思っていたより小さい」というものでした。銅鐸というものの姿形は知っていたけれども、実際に目にしてはじめて大きさの感覚を得ることができたようです。インターネット等で情報があふれている世の中ですが、このように博物館で本物を見ることで、様々なことを感じとることができます。今後は常設展示にいたしますので、いつでも実物の内間銅鐸をご覧ください。そして2000年前の人々がどのような願いを込めて銅鐸を作り、鳴らし、その音色を聞いていたのか、思いを巡らせてみてはいかがでしょうか。

（宮武 尚美）

（注１）

岡田唯吉「綾歌郡陶村銅鐸発見状況ノ大概」

『郷土博通信』22号３頁に全文写真を掲載しています。

久米通賢資料室

第2展示室

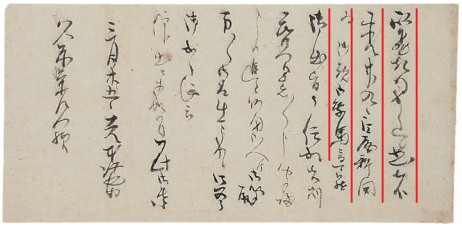
（展示期間：4月～9月）

高松藩主の坂出塩田視察

高松藩領内の大内郡馬宿村（東かがわ市）で生まれた久米通賢は、高松藩士（武家）の家の出身ではありませんでした。しかしながら、1806（文化３）年には、藩の命令で藩領内の沿岸を測量して地図を作製し、また、伊能忠敬の高松藩領の測量調査にも同行し、藩の天文方測量御用をつとめ、測量器具や銃砲類の製造・実演なども行って、藩からの信頼を得ていました。

1824（文政７）年10月、久米通賢は、高松藩の財政再建の方策として、藩による砂糖生産流通の保護政策と、坂出浦の干潟を利用して塩田をつくり、製塩業で藩財政を立て直すことを文書に記して高松藩に提出しました。高松藩の上層部（木村亘・筧助左衛門・堀造酒之助）は、何度か船で坂出に出向いて現地を視察しました。その内の一度は久米に塩田開発の設計図を持参することを命じていて、現地説明を求めたものと思われます。藩内には莫大な開発費用を要することから反対意見もありましたが、最終的には９代藩主松平頼恕の意向により、1826（文政９）年３月に久米は郷普請奉行に任命され、工事が始まりました。同年10月には西新開部分が出来上がり、翌1827（文政10）年２月には東新開と江尻新開の開発工事に着手しています。

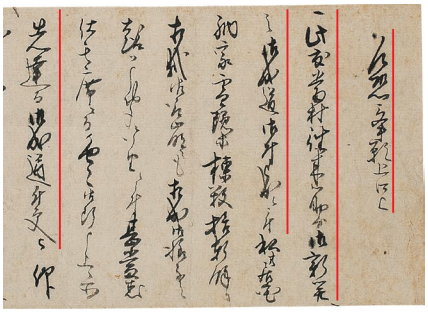
工事が進む中、『高松藩記』には、藩主頼恕が坂出に「時々御乗馬、または御船にて御出御覧になり、御自身で御指図もなされた」とあります。塩田の全容が見えてきた1829（文政12）年３月25日付の高松藩士・吉本弥之助の書状（図１）では、29日に藩主頼恕が江尻新開を視察するため、馬に乗って向かうことを久米に伝えていて、地元江尻には29日に頼恕が実際に検分した記録が残されています。



以飛札得貴意候、然者
来ル廿九日、江尻新開
為御覧、御乗馬二而可被遊
御出旨被仰出、（以下略）

▲図1　高松藩士･吉本弥之助の久米宛の書状

同年８月には、坂出塩田がほぼ完成しました。その直後、久米の功績を讃えるため、頼恕の指示で「阪出墾田之碑」が江戸で造られて船で坂出に運ばれ、12月に坂出塩田のほぼ中央（現在の坂出市京町）に建立されました。



乍恐奉願上口上
一此度、当村往来筋より御新開へ
之御成道御付被成候二付、（中略）
先達而御成道付更（以下略）

▲図2　「乍恐奉願上口上」

坂出塩田はこれ以降も、塩田の堤防の修正や追加工事が続けられました。

そうしたなか、２年後の1831（天保２）年７月、坂出村の住人が記した「乍恐奉願上口上」（図２）によると、丸亀街道（現在の四谷シモン人形館付近）から北上して新開地に至る道を藩主が通る「御成道」として整備することになり、十軒あまりの屋敷建物の立ち退きが必要とされたことから、計画内容の変更を懇願したことがわかります。

「御成」は、藩主の代替わり後に実施される領内の村落の巡見や、特別な行事（墓参など）に限られており、このような塩田工事の視察のために何度も現地に行くことは例外中の例外であり、藩主が塩田開発の成功を熱望していたことは間違いありません。同様に、塩田開発は坂出村の住人にとっても大いに期待するところですが、複雑な問題があったこともたしかです。

（齊藤 祐司）

第3展示室

（展示期間：4月～9月）

一生に一度はこんぴら参り

金刀比羅宮は、香川県仲多度郡琴平町の象頭山中腹に鎮座する神社です。江戸時代までは金毘羅大権現と称し、人々には「こんぴらさん」と呼ばれ親しまれてきました。

金毘羅参詣が全国的に広まったのは、庶民の旅行がブームになった江戸時代です。当時、庶民の旅は禁じられていましたが、寺社への参拝は許されていたため、参詣を口実に旅行を楽しんでいたのです。金毘羅大権現は「一生に一度はこんぴら参り」と言われるほどに庶民が憧れた旅行先でした。今回の展示では、こんぴら絵図を中心に、金毘羅参詣の様子をご紹介いたします。

こんぴら絵図は、参拝者向けの土産物として販売された一枚刷りの絵図です。地元だけではなく、京都や大阪の業者も発行しました。参詣に訪れた人々は、郷里に戻るとこの絵図を見せながら、旅の思い出やこんぴらさんの素晴らしさを大いに語ったことでしょう。それが宣伝となり、金毘羅参詣のさらなる発展につながっていったのです。

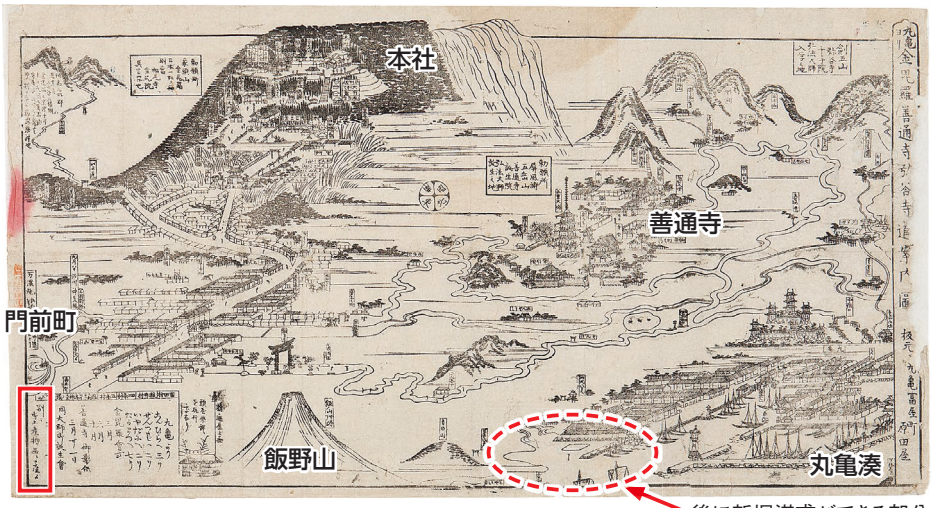
こんぴら絵図には様々な種類があることから、その人気ぶりがうかがえます。『町史ことひら 5　絵図・写真編』の解説によると、「京都・紀州からの案内図」「大坂からの案内図」「丸亀からの案内図」「象頭山と門前町の図」、祭礼図「頭人行列の図」「寄進物等の図」の６種類に分類されます。

四国に上陸してからの「案内図」は、丸亀からのものがほとんどです。これは、金毘羅五街道（丸亀街道、多度津街道、高松街道、阿波街道、伊予土佐街道）のうち、丸亀街道が最もにぎわっていたことを示す一例といえます。

「丸亀からの案内図」の一枚をご紹介しましょう。図１は丸亀富屋町の原田屋が発行したものです。左下の枠内に「別ニ御土産物品々御座候」とあり、絵図以外の土産物も扱っていたことがわかります。右下に丸亀湊があり、1833（天保４）年に完成した新堀湛甫（船着場）は描かれていないことから、それ以前に描かれたものです。丸亀湊の左上には五重塔が聳え立つ善通寺が描かれ、さらに左に目を移すと多くの家屋が軒を連ねる門前町があり、参道、本社へとつながっています。

こんぴら参りの人気は今なお衰えていません。筆者も県外から友人知人が訪れた際には、必ずといっていいほど金刀比羅宮をご案内しています。息を切らせながら石段を登り切ったあと、御本宮から眺める讃岐平野の美しい景色は、今も昔も変わらぬ「こんぴらさん」からのご褒美ではないでしょうか。

（宮武 尚美）



▲図1　「丸亀ヨリ金毘羅善通寺弥谷寺道案内図」

「新史料からみる貴族院議員としての鎌田勝太郎」

第13回公開講座から
小林 和幸氏
（青山学院大学文学部教授）

新史料から見る貴族院　多額納税者議員　鎌田勝太郎

1　はじめに

鎌田勝太郎は、元治元（一八六四）年一月醸造業で成功した鎌田家に生まれ、家業の醤油醸造販売、製塩事業の拡大に努め、香川県において多くの企業を興し、大陸の拓殖開発事業も展開しました。また、香川県の教育育英事業にも済々学館の創立や香川県育英会理事長として、さらに社会教育事業にも財団法人鎌田共済会を設立して精力的に従事しています。

その一方で、政治家として、香川県会議員、衆議院議員、貴族院議員を務め、坂出や香川県さらに国家の発展に寄与する重要な政治活動を行っています。今回は、鎌田共済会郷土博物館に鎌田家から寄託された膨大な史料をひもとき、鎌田勝太郎の貴族院議員としての政治活動を検討していきます。

2　「鎌田勝太郎関係文書」について

「鎌田勝太郎関係文書」は、鎌田勝太郎が残した膨大な史料であり、鎌田勝太郎の帝国議会（衆議院議員・貴族院議員）を舞台とする国政に関わる政治関係史料、地元の坂出から国内さらに朝鮮半島に及ぶ経済活動に関する経済関係史料、坂出や香川県で行った社会教育・図書館・博物館運営などの文化事業に関係する史料などが含まれています。この史料につき、私は、帝国議会貴族院の研究を進めていた関係で、二〇年程前より興味を持ち、史料調査を始めました。しかし、当時は、資料目録もなく、未整理の状況であり、鎌田正隆鎌田共済会理事長の許可を得て、政治関係資料について、歴史学的調査と目録作成を行うことになりました。「鎌田勝太郎関係文書」を調査した結果、一部、かつての伝記編纂過程などで散逸したものはあるものの、貴重な史料は多く、近代日本の議会政治研究に資するところは、大であると判明しました。現在までの調査の概要は、刊行されました『貴族院議員鎌田勝太郎とその資料』(※) をご覧いただければと思います。

3　貴族院について

帝国議会の一院である貴族院については、現在は存在しないこともあり、あまり知られていないと思いますので簡単にその期待された役割を説明致します。日本は明治維新後、「五箇条の御誓文」で「広く会議を興し万機公論に決すべし」との目標を達成するための努力を続けておりましたが、様々な歴史過程を経て、「大日本帝国憲法（明治憲法）」により、帝国議会が開設され、制限はありましたが国民を代表する衆議院が設けられました。その衆議院とほぼ同等な権限を与えられたのが、貴族院でした。貴族院設置の目的は、①政権の平衡を保つ、②政党の偏張を制す、③上下調和の機関となる、④国福民慶を永久に維持する（「憲法義解」）といった役割を果たすことでした。そのため、公平性と独立性が求められ、構成者は、皇族、華族議員として公・侯爵議員（世襲、終身）と伯・子・男爵議員（同爵間の選挙で選ばれた者、任期七年）、勅任議員として勅選議員（終身）と各府県の多額納税者一五名が互選する多額納税者議員（任期七年）でした。こうした構成者は、伝統的な統治の経験や専門知識を持つなど、独立した立場から公正な立憲政治運営を担うことが期待されていました。

4　政治家としての鎌田勝太郎

鎌田勝太郎の国政への参入は、衆議院議員から始まりました。明治二七年には衆議院議員に当選します。当時の香川第三区では、綾井武夫派と都崎秀太郎派の両派が伯仲して選挙戦を繰り広げていましたが、明治二七年選挙では、両派が「契約証」を交わし、都崎派の鎌田勝太郎が両派から支持を受けて当選したことが、今回紹介する史料から明らかになりました。

鎌田勝太郎は、坂出の塩田関係者の期待を担い衆議院で「清国ニ向ヒ食塩輸出ノ建議案」を提出するなどの実績を残しました。しかし、先の「契約証」では、二年間の議員後、議員を他派に譲るとされていたため、衆議院に明治二九年六月辞表を提出致します。

その後、明治三〇年の多額納税者議員の改選において、当選、その後連続当選して四期二八年間にわたり、大正一四（一九二五）年まで引き続き在任しました。

貴族院では、衆議院時代から政治活動で連携した多額納税者議員の野崎武吉郎と行動を共にし、公爵近衛篤麿や子爵曾我祐準、子爵谷干城と政治的に近づいていたことが、関係文書からわかります。貴族院議員就任後、第一二議会に、鎌田は発議者となって「植物病理研究所設置に関する建議案」を提出しました。この建議案は、農産物の病害虫による被害は甚大であるので、農商務省の農事試験場の他に研究所設置し、病害虫駆除の方法を研究することを求めたものでしたが、鎌田が帝国大学での就学を経済的に支援した堀正太郎の助力により提出されたものであることが、判明しました。建議案は貴族院で採決された後、政府でも採用を決定し、農商務省の農事試験場に病理部が設けられ、その初代病理部長には堀正太郎が採用されたのでした。

また、谷干城と連携して山県有朋内閣の進めた地租増徴に反対するなど、藩閥政府批判も辞さない活動を展開しました。

貴族院内では、近衛篤麿が率いた朝日倶楽部に属していましたが、立憲政友会が結成されると、香川県の政治家と図ってそれに属しました。鎌田は、政友会内でも有力者となり、衆議院議員選挙で政友会が圧倒的強さを誇る「政友王国」と香川県が称されることになる原動力になりました。多額納税者議員選挙でも鎌田は強さを発揮しますが、明治三七年の改選時には、反対派が結束して対抗したため、自選投票によってその危機を乗り越えました。鎌田は、当選後、あえて辞職し、あらためて選挙で多数を得て当選するといったことがあったことも、史料からわかりました。

明治後期からは貴族院では、土曜会に入り、明治末年頃には、鎌田は曾我祐準や久保田譲らとならぶ有力議員となりました。

5　貴族院改革論の提示

そのような鎌田は、大正期の貴族院内会派再編期以降、貴族院での政友会系会派交友倶楽部に属し、大正一〇年には、『三田評論』に「貴族院制度改正に就いて」を発表し、貴族院改革の必要を力説致します。鎌田の貴族院改革論は、①多額納税者議員の制度を廃止し、各府県から議員選出の方法を設ける。②勅選議員は終身制を止めて年限を付す。③学者の採用を増やす。④公侯爵の世襲議員を廃し公侯伯子男爵すべてを選挙に依ることにし、⑤従来の連記制を改正する、といった内容でしたが、これらは、大正期の新しい政治思潮の中で貴族院が本来期待された役割を発揮するために改革が必要というものであり、重要な政治的意義を有するものでした。鎌田の改革論提議は、貴族院改革の機運を盛り上げ、加藤高明内閣による貴族院令の改正につながっていきます。しかし、加藤内閣の貴族院改革は、鎌田の持論とは、ほど遠く、鎌田が「斯の如き生温い案

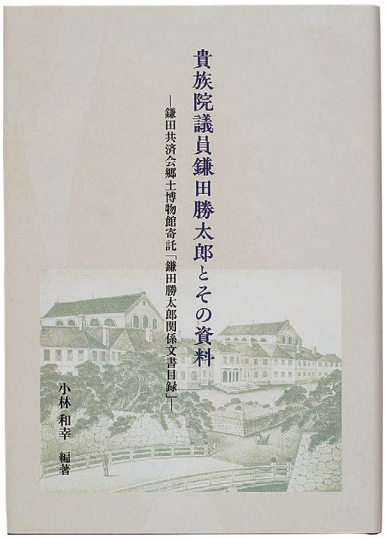
を提出されると云ふことは、実に憲法、立憲主義の政党の首領として不甲斐ない」と述べた史料が残っています。

おわりに

以上、鎌田勝太郎の政治的活動を、鎌田共済会郷土博物館の寄託史料を紹介しながら検討いたしました。鎌田の政治活動は、衆議院議員選出の頃から、地元香川県の発展に貢献することへの使命感が基底として存在し、さらに日本国家の飛躍を目指すものでした。

貴族院議員としては、近衛篤麿や谷干城、曾我祐準と連携し「国民主義」的な政治路線にあり、また立憲政友会の創設期に党員となったことなどを見ても、早くから政党の時代を予見していたことがわかります。また、進取の気質によって成功した実業家らしく世界情勢に関心を持ちつつ、社会の将来を見通そうとする志向が強く、それが、貴族院改革の主張につながったと思われます。

今後、「鎌田勝太郎関係文書」の利用により、新しい日本近現代史研究が切り開かれていくことを願っています。



B5版　291頁

(※)　本書は、青山学院大学文学部教授小林和幸氏の編著になるもので、明治時代に貴族院議員を務めた鎌田勝太郎の政治的な経歴を、「鎌田勝太郎関係文書」からたどるとともに、先生が約20年にわたり取り組んでこられた同文書の調査と資料整理の成果を「資料目録」として掲載するものです。

『貴族院議員鎌田勝太郎とその資料—鎌田共済会郷土博物館寄託「鎌田勝太郎関係文書目録」』の購入等につきましては、当博物館にお問い合わせください。

TEL:0877-46-2275

E-mail:k-museum@kamahaku.jp

『ポケット文庫』について

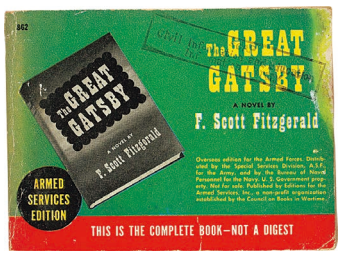
（表紙解説）

当館においてポケット文庫と称して所蔵している蔵書群は、元を正せば1943～1947年にアメリカ合衆国（以下、アメリカ）の戦時図書審議会が戦地の兵士のために発行したものです。短辺側を綴じる横長タイプの形態をしており軍服のポケットに収まるサイズで印刷されました。既存のフィクション、ユーモア本、短編小説など多岐にわたるジャンルが編集され、表紙（図1）には原本のカバー絵を縮小したものが載っており、裏側の表紙（図2）には作品の概要が記載されています。

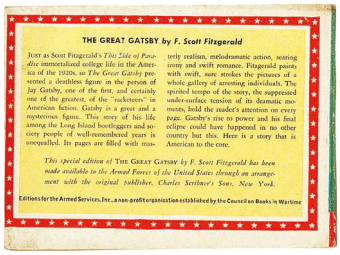
アメリカではArmed Services Editions（ASEs）と呼ばれたこれらは、兵士にとって心の拠り所となるものでした。彼らが好んだ作品は本土の人々も読むようになり、採用された作品がアメリカ文学の代表作となることもあったようです。例えば『The Great Gatsby』は、1925年に発表された当初は話題にのぼりませんでしたが、1945年10月に出版されたことをきっかけに人気作品となりました。1世紀近く経った現在でも映画やミュージカルとして楽しまれていますので、戦後の芸能文化にもたらした影響力は大きかったと言えます。

それでは、そのような目的で作られた本がなぜここにあるのでしょうか。戦後、アメリカの教育制度が日本へ導入され英語学習や成人教育の重要性が説かれるようになりました。これに伴いGHQの軍政部によって英語表記の図書や雑誌とともに文庫が寄贈されたため、国内ではこれらを一括して「アメリカ文庫」（図3）と称し、各県内の教育機関や図書館へ配布しました。1946（昭和21）年5月に香川県内務部長が出した文書の中には、アメリカ文庫専用の書架を設置することや、「巡回貸出」に務めてほしい、と活用法が記されており市民への閲覧を推奨しています。当時図書館の運営を行っていた当共済会も、この通達に従い文庫を公開しました。数奇な運命を辿ってきたこれらの本は、戦後の日本教育を変える新しい風としても、一翼を担っていたのかもしれません。

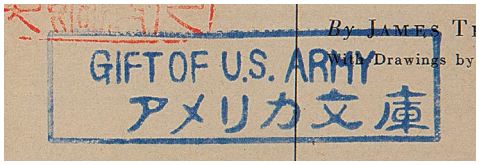
（矢野 愛）



▲図1　表紙



▲図2　裏表紙



▲図3　『GIFT OF U.S. ARMY アメリカ文庫』印

INFORMATION

■陶芸体験講座Ⅱ

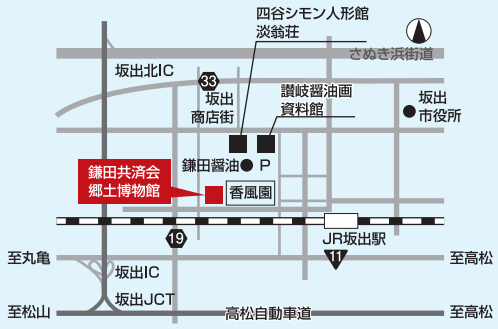
「夏休み！　埴輪（はにわ）づくり」

2024年**7**月**27**日（土）14:00～15:30
会　場：鎌田共済会郷土博物館２階講堂
講　師：黒田 大（おおき）・真里子先生（黒田陶房）
対　象：小・中学生
参加費：￥1,000（粘土、焼成費込み）
お渡し：約１ヶ月（当館にて受取り）
●電話にてお申込み下さい。電話：0877-46-2275
【要予約、申込７月２日㈫から、先着25名】

■今後の予定　第14回公開講座

2024年10月下旬
「内間銅鐸について」（仮）
講　師：竹内裕貴氏
（香川県教育委員会　生涯学習・文化財課）
※詳細につきましては、後日ホームページなどにてお知らせいたします。

鎌田共済会郷土博物館



Access
高松から…快速マリンライナーで約15分
岡山から…快速マリンライナーで約40分
JR予讃線坂出駅から徒歩5分
※駐車場あり

開館時間：午前9時30分～午後4時30分（入館は4時まで）
休 館 日：月曜日／祝日
夏季特別（8月13日～15日）
年末年始（12月29日～1月4日）
入 館 料：無料

参考文献
・熊野勝祥『香川県図書館史』（1994.6.27）
・モリー・グプティル・マニング『戦地の図書館 海を越えた一億四千万冊』（2020.11.27）
・公益財団法人 鎌田共済会郷土博物館『ここに100年 そして未来へ－鎌田共済会図書館 郷土博物館のあゆみ－』（2022.10.1）

□発行 2024 年 4 月 1 日　□発行所 公益財団法人 鎌田共済会郷土博物館 〒 762-0044 香川県坂出市本町 1-1-24
TEL：0877-46-2275　FAX：0877-45-0035　HP：https://www.kamahaku.jp/　E-mail：k-museum@kamahaku.jp